

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02833

研究課題名（和文）英語教師の成長を促す実践共有コミュニティ構築プロセスの解明

研究課題名（英文）"Unraveling the process of building a community of practice to foster the growth of English teachers"

研究代表者

高木 亜希子 (Takagi, Akiko)

青山学院大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：50343629

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語教師の質的向上を目指すために、実践研究を軸にしながら、実践を協働的に省察する実践共有コミュニティのあり方に着目し、他者と実践を共有する上で直面する課題を明らかにした上で、実践を共有するコミュニティの構築過程メカニズムを整理した。教師の成長を促すコミュニティの構造やあり方を整理し提案することは、同僚性を持ち難くなっている学校教育において、教師教育の充実化を促す鍵になるものと考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、学校教育において、様々な課題があり、教師の日々の実践研究を通して教師成長を促す仕掛けづくりを行うことは急務である。とくに、英語教育では、教師が主体的に行う実践研究は、注目され始めたばかりであり、教師が共同で行う実践共有コミュニティのあり方については十分に議論が行われているとは言えない。本研究成果は、英語教育の実践に留まらず、学校教育における実践全体へ応用しうる示唆を得ることができるものである。

研究成果の概要（英文）：This study focused on establishing a community where teachers collaboratively reflect on their practice with the aim of improving the quality of English teachers.

We made emphasis on practitioner research and clarified the challenges teachers face when sharing their practice with others. Furthermore, we elucidated the mechanisms involved in the process of building a community that shares practice. We believe that organizing and proposing the structure and nature of a community that fosters teacher growth can be a key factor in enhancing teacher education, especially in school settings where collegiality has become increasingly challenging.

研究分野：英語教育学

キーワード：実践研究 実践共同体 協働的省察 教師の成長 授業改善

1. 研究開始当初の背景

教師成長に関わる「経験学習モデル」では、教師は日々の営みの実践（具体的経験）の中で、実践を振り返り（内省的観察）実践に関する仮説や理論を構築し（抽象的概念化）その後再試行する（能動的実験）というサイクルを繰り返し成長が促されるとされる。本研究で扱う実践共有コミュニティでは、実践を他者と共同的に省察するプロセスを持つことで、他者の視点や知見を取り入れた協働的省察を行うことになり、教師成長をより促す可能性を秘めている。

これまで本科研グループは、中部地区英語教育学会の課題別研究プロジェクト「英語教育の質的向上を目指した実践研究法のデザイン」（2014年から2017年まで）において、教師の成長や授業改善を目指し、英語教師が日々の実践の中で行う実践研究の研究方法に焦点を絞り、実践研究のあり方について議論を続けてきた。具体的には、実践研究の定義の整理、実践研究論文の内容と研究手法の分析、実践研究に対する英語教師の意識調査、実践研究を進める際に直面する研究方法に関する聞き取り調査を実施した。本プロジェクトに続き、「実践研究法の英語教育の質的向上を目指した実践研究法の整備と可能性の探究」基盤研究（C）（17K04811）（2017年度から2019年度まで）において、英語教育における実践研究法の整備を行った。

実践研究の方法論は、各教師が自律的に実践研究を進める手助けにはなるが、今後教師が忙しい日々の営みの中で実践研究を続けるために、協働的に支え合う校内・校外における実践共有コミュニティの役割が重要となる。実践共有コミュニティでは、実践者、実践者の同僚と教師仲間を中心としながらも、管理職、行政、教職大学院の指導者、研究者など様々な立場の参加者が対等な立場で相互に支え合いながら関わることで、実践者及び参加者が成長するのみならず、児童・生徒へ還元され、実践知と理論知の往還と新たな知見の積み上げに寄与される。そのことが、ひいては英語教育全体の実践と研究の向上につながると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語教師の実践を共有するコミュニティにおいて、他者と実践を共有する上で直面する課題を明らかにし、他者と実践を共有する過程における教師の認知と行動のメカニズムを整理することで、英語教師の成長を促すコミュニティのあり方について具体的方策を提案することにある。実践共有コミュニティとは、英語教育における授業実践を共同的に省察する学習共同体と捉え、実践研究を軸にしなが、参加者全員の実践理解や授業改善を目指すものである。研究課題として以下の2つを設定した。

- (1) 実践共有コミュニティの中で、実践発表者が他者と実践を共有する上でどのような課題に直面するのか。
- (2) 実践共有コミュニティにおける他者との協働的省察が、実践発表者および参加者の成長にどのように影響するのか。

3. 研究の方法

上記研究課題を明らかにするために、以下の方法で研究を行った。

(1) 研究授業後の検討会の課題と対応策の検討

実践研究を個人のみではなく、学校内外のコミュニティの中で共有しながら実施することを念頭に置き、研究授業後の検討会において、教師がどのような課題を認識しているのかを明らかにし、その課題に対する対応策について検討した。

(2) 英語教師の実践共有コミュニティの理論的枠組み及び授業研究とその課題の整理

英語教師の実践共有コミュニティの理論的枠組みと教師のコミュニティにおける授業研究とその課題について整理した。

(3) 教師の協働的省察の可能性の検討

英語教育の分野に即して省察および省察的実践の理論に関する議論を整理し、省察的実践の課題を示した。次に、外国語としての英語教育の分野における教師の協働的省察に関する先行研究を概観することで、今後の実践と研究の可能性について示唆を得た。

(4) 実践共有コミュニティにおける機能と課題の調査

現存する16団体を対象に、英語教育に関する実践共有コミュニティにおける機能と課題についての調査を実施した。

(5) 実践共有コミュニティの運営及び利点と課題の検討

全国の小中高の英語教師が参加し、実践研究を共有するオンラインの実践共有コミュニティを立ち上げ、月一回1期半年のサイクルで、2期運営した。本実践に基づき、コミュニティ運営の利点と課題を明らかにした。

4. 研究成果

(1) 研究授業後の検討会の課題と対応策の検討

本研究では、英語教育の分野における研究授業後の検討会で、どのような課題を教師が認識しているのかを明らかにし、その課題に対する対応策について検討するために、フォーカス・グループ・インタビューを実施し、検討会の課題について参加者の発言を記録し、逐語録をもとに質的内容分析を行った。

英語教育における研究授業の検討会の進め方については、授業者が授業の説明や振り返りを行った後、参加者が意見を述べ、最後に指導助言者の講評が述べられることが多いことが分かった。授業に対する意見交換は、グループ別に行われる場合や全体で共有する場合があり、事前に決められたテーマに基づき意見交換をする検討会もあれば、テーマが決められず自由に意見を発言する場合もあることも分かった。とくに、学校内で検討会をもつ場合には、他教科の教員と行うこともあり、学校外での検討会では、小中連携のもとに異校種の教員での検討会も開かれていることが明らかとなった。検討会の際には、参加者の意見を共有するために、付箋やホワイトボードを使ったり、録画した授業ビデオを見て検討を行ったりするケースもあることが明らかとなった。

また、研究授業後の検討会を行う上で、様々な問題があることも明らかとなった。限られた時間の中で、授業に関わる文脈を参加者全員と共有することは容易ではなく、授業者と参加者の視点にもずれが生じることも多く、授業者および参加者ととも検討会での学びを深めることは容易ではないことも分かった。とくに、他教科や異校種といった様々な教員が参加する検討会においては、教員間の関係性などの要因から、率直な意見交換を行うことが難しい場合もあることも分かった。

教員の多忙さが増す昨今では、指導案を準備し研究授業を提供する授業者の負担は大きく、研究授業の授業者が固定化したり研究授業の実施が義務化したりして、自発的な研究授業が行われにくくなっているという問題があることも明らかとなった。

(2) 英語教師の実践共有コミュニティの理論的枠組み及び授業研究とその課題の整理

英語教師の実践共有コミュニティの理論的枠組み

理論的枠組みとして、「実践共同体 (Community of Practice : CoP)」に着目し、その基本概念を整理するとともに、外国語 (英語) 教師教育及び実践研究との関連から CoP を理論的枠組みとして用いている先行研究を概観した。教員養成課程において、省察的対話を促す CoP の意義を明らかにする報告がある一方で、現職教員が CoP を形成した場合のその維持の難しさも報告されていた。CoP を維持するための要素として、周辺メンバーへの支援の有無、参加者同士の感情や教育観の共有、メンバーの参加への負担感やメンバー間の信頼関係、アイデンティティの形成、教師としての役割などがあり、それらの要素を十分配慮することが CoP の維持には求められることが明らかになった。

授業研究とその課題

学校内の教師コミュニティに関する「学びの共同体」と「専門職の学習共同体」という 2 つの概念の観点から、学校内で行われる授業研究を捉え直した。そこで明らかになった授業研究の課題は、校内研修の一環として授業研究が行われており、授業研究における教師の自発的かつ能動的な参加が、十分には担保されていないことであった。

課題を踏まえ、英語教師の成長と専門性の向上に資する学校内外の教師のコミュニティの可能性として、教師による主体的な実践研究を共有する学校内外の教師のコミュニティ、学校内外の教師のコミュニティの往還、教師のコミュニティにおける協働的な省察のあり方について言及した。

(3) 教師の協働的省察の可能性の検討

英語教育の文脈に即して、教師による省察および省察的実践の理論に関する議論を整理し、省察的実践の課題を指摘した。その上で、協働的省察の重要性に言及し、EFL 環境における教師の協働的省察に関する先行研究を概観した。そして、英語教育における教師の協働的省察の利点と可能性を考察した。教師による協働的省察の利点は、他者との対話により新たな実践に対する気づきを促し、実践の理解のみならず改善へとつながる可能性、協働的省察による教師の省察の深化、同僚との対等かつ補完的な関係による協働的省察の促進の 3 点が挙げられた。

協働的省察の研究における今後の課題について以下の 4 点が明らかになった。1 点目は、長期的なスパンで協働的省察の効果を調査し、協働的省察がどのように教師の成長を促すかについて、詳細な考察が必要である。2 点目は、協働的省察における教師がどのような関係にあり、どのように協働的省察を行うのか、あるいは、同僚との協働的省察の限界はどこにあり、どのような留意点が必要なのか、を明らかにする必要がある。3 点目は、教師の協働的省察の中で、どのような教師同士の働きかけが教師個人の信念や実践の変容に影響を与え、教師の成長につな

がるのかを分析する必要がある。4 点目は、協働的省察を通して、教師の実践について批判的省察の段階までの深化を促すためには、どのような支援をすればよいかの検討が必要である。最後に、学校内の授業研究をとおした協働的省察のみならず、学校外で異なる学校の教師が集まるコミュニティにおいて、協働的省察がどのように教師個人の成長に影響を与えるのかについて研究が待たれる。

(4) 実践共有コミュニティにおける機能と課題の調査

小・中・高・大の英語教育に関わる CoP である 16 団体を対象に、英語教育に関する CoP の実態を明らかにするために、コミュニティがどのような機能を有しているか、またどのような課題を抱えているか、質問紙調査を実施した。その結果、実践に根ざした CoP が多いこと、メンバー間の関係や交流、学びや共有を重視していることが報告された。また、運営面やコミュニティの継続、参加者の主体性について実践コミュニティの課題が挙げられた。

(5) 実践共有コミュニティの運営及び利点と課題の検討

実践共有コミュニティとして立ち上げられた実践研究連続講座は、第 1 期、第 2 期とも、半年間で月に 1 回、計 6 回開催された。講座の参加者は、第 1 期は小・中・高の教員 9 名、第 2 回は 11 名であり、メンター（プロジェクトメンバー）は、9 名であった。講座の目的は、日頃の実践の営みの中で、自身の実践の理解及び改善のために、実践研究に継続的に取り組み、講座のメンバーと実践研究の過程を共有することで、実践についての学びを深めることであった。

振り返りシートとフォーカス・グループ・インタビューにより収集したデータに基づき、実践研究講座のどのような側面に参加者は満足感を得たか、実践研究講座のどのような側面が課題であったかの 2 点について明らかにした。テーマ分析の結果、参加しやすい環境、参加者との実践研究の共有、メンターとの実践研究の共有、共有機会の設定による研究の促進、運営メンバーの良好かつ明確な関係性、研究と実践のバランスの難しさの 6 つのテーマが浮かび上がってきた。

運営で機能した点は、月 1 回程度という開催頻度と場所を問わず参加することができたこと、自分で実践研究を行い、その研究について語る機会があったこと。実践研究を実際に進めるためのペースメーカーとなったこと、他の参加者の実践研究のプロセスや振り返りのプロセスを知る機会があったこと、他の参加者からの刺激・動機づけ、実践者のもやもやを整理し焦点化する機会があったこと、運営メンバーの良好な関係性、運営メンバー内での明確な役割分担の 8 点が挙げられた。一方、課題として、講座の到達点（のイメージ）についてメンター間での共有、研究スキルの学び方の探究、講座外でのやり取りの手段についてメンター間での共有の 3 点が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 南侑樹・永倉由里	4. 巻 52
2. 論文標題 英語教育における実践研究共有コミュニティの実践	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 163-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Takeo Tanaka, Yuki Minami, Akiko Takagi	4. 巻 9
2. 論文標題 The potential of teachers' collaborative reflection in English language teaching: In light of theories and problems of teacher reflection and reflective practice	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Language Teacher Education	6. 最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 乗富智子・滝沢雄一	4. 巻 52
2. 論文標題 小学校外国語科における話すこと [やり取り] の力を育成するための段階的指導	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 171-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 永倉由里	4. 巻 43
2. 論文標題 小学校英語授業を通して自律性・関係性を育むには：理論的考察と教師が担うべき役割	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 常葉大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 149-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18894/00002434	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田卓郎・南侑樹・河合創・宮崎直哉	4. 巻 41
2. 論文標題 ビデオ会議ツールを活用したオンライン読書会に対する認識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永倉由里、藤田卓郎、南侑樹	4. 巻 51
2. 論文標題 英語教育における実践コミュニティの特徴と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20713/celes.51.0_71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中武夫・南侑樹・高木亜希子	4. 巻 9
2. 論文標題 英語教育における教師の協働的省察の可能性：教師による省察と省察的実践の理論と課題を踏まえて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語教師教育	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永倉由里	4. 巻 42
2. 論文標題 模擬授業を通じて自己省察力を養うには	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常葉大学教育教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 255-278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南侑樹	4. 巻 41
2. 論文標題 英語授業におけるリアクションペーパーを用いた実践研究 媒体の違いに焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤知英	4. 巻 51
2. 論文標題 主体性を育むノート作りとそのプレゼンテーション	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 133-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20713/celes.51.0_133	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木亜希子・田中武夫	4. 巻 12
2. 論文標題 英語教師の実践研究共有コミュニティ：先行研究に基づく理論的枠組みの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青山学院大学教育人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 105-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木亜希子・田中武夫	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 教師のコミュニティにおける授業研究とその課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語教師教育	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木亜希子・藤知英	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 授業改善を目的とした実践研究における同僚との関わりー中学校英語教師の認識ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語教師教育	6. 最初と最後の頁 20-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥村直史・田中武夫	4. 巻 50
2. 論文標題 英語の文学的テキストに対する大学生の読みと認識の変容について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 193-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20713/celes.50.0_193	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林哲也・酒井英樹	4. 巻 15
2. 論文標題 専科教員による教科書を用いた外国語科の授業作り 6年生の単元『Welcome to Our School』の実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 287-298
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永倉由里	4. 巻 50
2. 論文標題 協同的省察を取り入れたストラテジー・トレーニング	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 185-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20713/celes.50.0_185	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永倉由里	4. 巻 41
2. 論文標題 英語 におけるICT活用と協同的省察の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常葉大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 349-372
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永倉由里	4. 巻 4(2)
2. 論文標題 小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善ならびに情報共有コミュニティの構築	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育実践報告誌	6. 最初と最後の頁 37-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永倉由里	4. 巻 69(3)
2. 論文標題 大学での実践研究 学生とともに学びを見つめる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 19-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 南侑樹・永倉由里
2. 発表標題 英語教育における実践研究共有コミュニティの実践
3. 学会等名 第51回中部地区英語教育学会福井大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田卓郎
2. 発表標題 タスクのマイクロ評価から考える実践研究
3. 学会等名 外国語教育メディア学会(LET)第 61 回全国研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 南侑樹
2. 発表標題 若手!?!による若手のための授業のお悩み共有スペース
3. 学会等名 関西英語教育学会第28回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 乗富智子・滝沢雄一
2. 発表標題 学校外国語科における話すこと [やり取り] の力を育成するための段階的指導
3. 学会等名 第47回全国英語教育学会北海道研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤知英・山本裕也・高木亜希子
2. 発表標題 ジャーナルによる教師の省察と同僚の定期的なフィードバック
3. 学会等名 言語教育エキスポ2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田卓郎・南侑樹・河合創・宮崎直哉
2. 発表標題 ビデオ会議ツールを活用したオンライン読書会の効果と課題
3. 学会等名 全国高等専門学校英語教育学会 第44回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永倉由里・藤田卓郎・南侑樹
2. 発表標題 実践共有コミュニティに関する調査から読み取れる英語教育の現状とニーズ
3. 学会等名 中部地区英語教育学会 第50回記念愛知大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田卓郎
2. 発表標題 英語教師のための実践研究法ワークショップ
3. 学会等名 外国語教育メディア学会（LET）第60回全国研究大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南侑樹
2. 発表標題 英語授業におけるリアクションペーパーを用いた実践研究－媒体の違いに焦点を当てて－
3. 学会等名 全国高等専門学校英語教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	滝沢 雄一 (Takizawa Yuichi) (00332049)	金沢大学・学校教育系・教授 (13301)	
研究分担者	酒井 英樹 (Sakai Hideki) (00334699)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	
研究分担者	永倉 由里 (Nagakura Yuri) (00369539)	常葉大学・教育学部・教授 (33801)	
研究分担者	田中 武夫 (Tanaka Takeo) (50324174)	山梨大学・大学院総合研究部・教授 (13501)	
研究分担者	南 侑樹 (Minami Yuki) (60845650)	神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・講師 (54502)	
研究分担者	藤田 卓郎 (Fujita Takuro) (70735125)	福井工業高等専門学校・一般科目(人文系)・准教授 (53401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------